

団長の独り言

「常に芝居は変化、進化する。」

新メンバーを迎えての稽古、クライマックスシーンまで辿り着けた。

「役者が代われればこうも芝居が変わるものかっ！」というほど前回公演とはまるで違う演出となり、日々新鮮な気持ちで、「ふたりのゆめ」という作品と向き合い、本日より、各シーンをより細かく付けていく稽古へと突入する。

最初のシーンは問題なく過ぎていくが、元大物演歌歌手で、現在は老人ホームの住人である三浦知世の元に、彼女が以前所属していた事務所「オーシャン・ミュージック」の「岸本良美」というマネージャーが訪ねてきたシーン2での二人の役者のやり取りに違和感があり、芝居を止める。

「岸本」演じるあゆみちゃん（須藤あゆみ）が、「知世」演じるゆみさん（ますだゆみ）に笑顔で話しかけている芝居が浮いているように感じた。

そこで「何故笑顔での芝居をするの？」と彼女に訊ねたら、「ここは、笑顔で話しかけるようにってダメをだされたので…」との事。

んんん！？つかあ〜以前このシーンの芝居を付けた時には、確かにそんなダメを出したような気がする…。

その時のあゆみちゃんはダメ出し通りに「笑顔」で話しかける「岸本」を演じ、その芝居を受けた「知世」とのやり取りがみように面白くて、「知世」と「岸本」の関係性がうまく表現出来ていた。それなのに何故だろうか？今日の「岸本」は、とても不自然に感じてしまう。ちゃんと前回のダメ出しを活かした芝居をしているのだが、なんか違う。

そこで「今日の私」は、このシーンの「岸本」は笑顔ではなく、真っすぐ「知世」の目を見て、一生懸命、「行方知れずのあの人歌合戦」というテレビ番組の出演依頼を「知世」にしてもらうべく、前回、このシーンを行った時とはまるで違うダメを出してみた。

「笑顔はなし！真剣に！一生懸命、知世に伝えて！」

前回と全然違うダメを彼女は出されて、ちょっと戸惑ってはいたけれど、すぐさまのダメ出しを活かした「岸本」を演じるといい感じ！聞くところによれば、私の演出って、ダメ出しが日によって違うってことがよくあるらしい。

それでもみんなは、「分かりました！」と言って、「最新のダメ出し」を素直に受け入れてくれる。

いやはや…申し訳ないです。

ただ、そんな現象も「どんな演出がいいか？」と試行錯誤の繰り返ししている今のうちだけ（のはず）。

芝居が固まるまでは、大体こんな感じでの稽古が続くので、何卒、ご理解いただければと思う。

あと、今日の稽古で結構時間を割いたのが、劇団ふぁんハウスの稽古では珍しい、役作りを行う上での共演者同士のディスカッション。

お互いの役が何を想い、どういう気持ちでいるのか？それぞれの役の人物の立場からの様々な想いや、その時の気持ちや語り合う。

これがなかなか面白かった。

個々の役者は、思い思いの中でそれぞれの役作りはしてはいるが、時にその役作りが独りよがりとなり、空回りをして「作られた芝居」になってしまう場合があったのだが、じっくりと役の人物として共演者と話合って、とある場面を演じてもらうと、なんてーのかな？心が通い合い、嘘くさくに芝居になっていた。

次に「立花」の芝居に違和感のあるシーンを細かく稽古していく。

このシーンは、ラウンジで一人佇む「知世」に「こんにちは。今日もお一人ですか？」と老人ホームの従業員「立花」が声掛けるところから始まるのだが、芝居を観ている「立花」がどんな心境でラウンジにいる「知世」に声を掛けたのか？良く分からない。

そこで脚本には描かれていない部分を、即興劇（エチュード）で演じてもらう事にした。

設定としては、物語には登場しない「所長」が、「立花」に「あるお願い」をするという場面。

「所長」役は、たけもっちゃん（竹本和弘）にお願いをして、二人には自由にアドリブで、脚本に描かれていない部分のやり取りを行ってもらうと、やり取りがめっちゃめっちゃリアルで、面白くて見応えがあったので、もう一度、「こんにちは。今日はお出かけしないんですか？」と言って芝居が始まるシーン6を行えば、最初の嘘くさい芝居とは比べ物にならないくらい、自然で素直な「立花」が現れた！その「立花」の芝居を受ける「知世」役のゆみさんの芝居も変化して、とても穏やかで自然な感じに変化していた。

これぞ演劇のだいご味。（大袈裟…）

全てのシーンでも、こうした脚本に描かれていない場面の即興劇もやりたいところだが、さすがにそこまでの時間はない…。

でも今日の稽古は、稽古場にいた誰もが何かを掴むきっかけになったんじゃないかなあ？そんな、とても充実した稽古でありました。